

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：32601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06577

研究課題名(和文) Study of the applicability of "flipped learning" in bilingual education

研究課題名(英文) Study of the applicability of "flipped learning" in bilingual education

研究代表者

菊池 尚代 (KIKUCHI, Hisayo)

青山学院大学・地球社会共生学部・准教授

研究者番号：70756577

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はグローバル人材育成を目指す日本の大学英語教育に即した有効な教育方法を、特に英語媒体授業において通信情報技術を最大限に利用しながら模索することを目的とした。まずEU諸国(ドイツ、スウェーデン)と、東南アジア(タイ、マレーシア)、それぞれに存在する非英語圏での英語言語媒体授業(5大学10クラス)から、学生、教員、授業運営を調査後、同様に日本の大学3校での英語言語媒体授業を調査し、日本の高等教育で応用できる部分を分析した。学生のニーズ分析の必要性、学問的な日本語言語軽視の危険性、反転学習などの通信情報技術の利用のさらなる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The study had the objective of researching English medium instruction (EMI) employed in other countries, then analyzing how the techniques, including ICT, might be adaptable for Japanese universities. The research was conceived and conducted in the context of the international trend toward globalization, and the increasing prevalence of English. In particular, the study compared EMI in EU and ASEAN countries. The study confirmed that EMI instruction challenges at Japan are diverse, such as the need to guard against degradation or loss of the Japanese language and meeting the challenge of structuring meaningful classroom experiences and fair performance evaluation standards for diverse groups of students, with differing English competencies and contrasting cultural backgrounds. The use of ICT was found to be one of the suggested approaches for overcoming these challenges. Certain limitations of the study suggest the utility of further research.

研究分野：英語教育、メディア

キーワード：英語言語媒体授業 通信情報技術 (ICT) 大学英語教育 反転学習 スマートフォン

1. 研究開始当初の背景

英語の国際共通語化が進むにつれ、英語を媒体言語とした授業を提供する大学、大学院が世界的に増加している。しかし、その教育方法は明確に規定されておらず、また様々な呼称も存在している (Knagg, 2013)。例えば、Content and Language Integrated Learning (CLIL), Content Based Language Teaching (CBLT), English Medium Instruction (EMI), English Taught Program (ETP), English for Specific Purposes (ESP), English for Academic Purposes (EAP) などがあり、それぞれの呼称にはある一定の定義があるものの、世界的に統一されているとは言い難い。さらに英語言語媒体授業には授業内容の理解不足が全体の学力低下を招きかねないなどとする否定的な研究結果も報告されており (e.g., Hoare, 2010)、慎重な授業運営が求められている。日本においても、日本語で運営されている従来の授業から英語言語媒体授業への移行が、近年、各大学、大学院で多く行われており、日本語を一切使用せず、英語言語媒体授業の履修のみで卒業が可能な大学や学部、学科にも注目が集まっている。この背景には日本への留学生数増加への期待や、学生の留学への動機づけ、東京オリンピックを見据えた英語力改善、さらに世界的水準を勘案した日本の高等教育全体の質向上などの思惑が込められているが、こうした期待や目的が英語媒体授業を運営する具体的な教育方法の構築より先行している現状が否めない。さらに、小学校の英語授業開始や国際バカロレア認定校の推進、大学入学前の海外修学経験者の増加、またその修学先が多種多様であるなど、大学入学時の英語力の差は拡大傾向にあり、英語媒体授業の教育方法の構築は難境に陥っていると言わざるを得ない。

教育現場では、英語媒体授業は重い負担が課せられると感じる教員は多い。特に良く聞かれた理由は、学生間の英語レベルに差があり、授業の焦点が英語の文法や単語を教えることに終始してしまう、学生が途中で挫折してしまう、などであった。

一方、学生に目を転ずると、インターネット、特にスマートフォンの利用は急速に増加しており、本研究者は予めからこの情報通信技術の利点を英語教育に有効活用したいと考えていた。現在、授業現場では多くの場合、学生と教員間のメールのやり取りや、連絡事項、資料配布の拡散などに活用されているが、授業そのものへの利用は多くない。こうした状況の中、教室での一斉授業と個々の家庭(教室外)学習を入れ替えた教育方法である「反転学習」と呼ばれる手法が大学にも普及し、アメリカを中心に様々な試みとその寄与が報告され始めた (e.g., Freeman, 2012; Green, 2012; Sales, 2014)。

これらを勘案し、英語媒体授業の教育方法の構築に学生のスマートフォンや、情報通信

技術を導入することは、現存する問題点を改善する手掛かりとなりうるのではないかとその可能性を探る必要があるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究はグローバル人材育成を目指す日本の大学英語教育に即した有効な教育方法を、特に英語媒体授業において通信情報技術を最大限に利用しながら模索することを目的とした。そのために、具体的には以下の3点をあげた。

(1) 英語言語媒体授業実践の先進国であるドイツ、スウェーデン、マレーシア、タイの授業現場の課題と利点を学生と教員の視点から明らかにすること。

(2) 学生と教員の視点から、日本の大学における英語媒体授業の課題と利点を明らかにすること。

(3) 反転学習を含む、通信情報技術を英語言語媒体授業に利用することで学生に生じる影響と通信情報技術利用の可能性を調査すること。

3. 研究の方法

(1) 1年目は主に下記2点の研究を行った。

EU諸国と東南アジア(ASEAN)諸国の非英語圏内で、英語言語媒体授業を実践している大学教員の観点を調査した。EU諸国からは英語言語媒体授業で高く評価されているドイツ、スウェーデン (Education First English Proficiency Index, 2014)、ASEANからはビジネス上、グローバル展開で成功しているタイ、マレーシア (World Economic Forum, 2015)を今回の調査対象国とし、全5校の大学から協力を得て、10クラスの英語言語媒体授業を観察、記録、ビデオ録画し、データ分析を行った。なお、調査対象授業は全て、国際的な学生向けの授業ではなく、通常の現地大学生向けに提供された授業である。さらに担当教員(非英語母語話者10名)と現地学生のインタビュー(25名)及びアンケート(145名)調査を実施し分析した。また各大学の英語言語媒体教員(計60名)に4項目のアンケートを実施し、現在の状況と課題を調査した。

日本人の大学生(62名)に反転学習をさせた場合、教室外学習教材が教室内での内容と同じである統制群(28名)と、異なるがその異なることを知らせたうえで課題を遂行させた実験群(34名)を1か月間比較し、課題完成度を質的に調査分析した。

(2) 2年目は主に下記6点の研究を行った。

日本の大学生(48名)にインターネットを教室外で利用させた場合、どのような英語言語コンテンツに学習動機が高まるかアンケート調査を実施し分析した。

日本の大学生(29名)にスマートフォンで英語によるスピーキングビデオ(約1分)を週1回3か月間(計10ビデオ)作成させ、スピーキングの変化をスピーキング速度と内容面から量と質で調査分析した。また学生の課題遂行意欲の変化をアンケート調査した(事前事後アンケート)。

大学2年生(11名)に1年前の学生生活を振り返って個々に作成させた英語で語るスマートフォンビデオ(約1分間)を、大学1年生(27名)に授業開始前に視聴させ、動機づけ、及び授業の理解力にどのような変化がみられるか、インタビュー、及びアンケート調査を実施し分析した。

日本で英語媒体授業展開を前面に広報している私立2校、公立大学1校の協力を得て、観察、記録、ビデオ録画しデータ分析した。授業は英語力の高い、または英語を母語とする留学生がいる授業、英語レベルが大きく異なる学生が混在する授業を含めて調査対象とした。さらに担当教員(10名)、学生のインタビュー(15名)とアンケート(82名)調査を実施し分析した。

スマートフォンを利用して英語学習をさせた経験の有無、利用法、負担、可能性などにつき日本人教員(92名)のアンケートとインタビュー調査を実施し分析した。

市販の教材DVD(18本)を利用した統制群とバーチャルな環境のみで知り合った他大学の日本人大学生(計24名)が作成した教材ビデオ(18本)を使用した実験群で、反転学習における学生の学習動機と学習方略の視点からアンケートとインタビュー調査を実施、分析した。

以上、全てのインタビューは同意書をもとに行われ、録音、コード化、単語頻度分析、クラスター分析などを必要に応じて行った。

4. 研究成果

(1) 英語言語媒体授業に関して先進国から主に次の点が明らかになった。

教員は個々の授業言語の統一化を図っていた。つまり、母語が英語でない教員であっても、英語言語媒体授業を担当した場合、その教員は母語で同じ授業を教えることはしない。さらに、英語言語媒体授業と同質を担保しながら同科目を教員の母語で教えることができるかと回答した教員は少なかった。

英語能力が専門科目を英語で学ぶに至らない学生向けに、授業のパワーポイント教材などは前もってオンライン上で学べるようにしていた。

英語言語媒体授業担当教員は3カ国以上の日常会話レベルが可能であり、多種多様な留学生にも対応可能であった(58.3%)。

多くの教員は英語母語話者ではなく、調査対象国出身で留学経験があるか、調査対象国に留学していた非英語母語話者であった(83%)。

母語の必要性がわからず、母語より英語が必要であると回答した学生が83.5%おり、母語使用の動機の低下がみられた。

(2) 日本の大学における英語媒体授業に関して主に次の点が明らかになった。

英語言語媒体授業を展開するにあたって、教育方法に規範がなく教員に任されているため、個々の経験知に頼っている。

留学先で英語言語媒体授業を通し学位を得た教員が、その経験で日本人の学生向けに有効な英語言語媒体授業ができるとは限らない。むしろ、留学先で自らが学んだ教育方法との差を感じている教員も多い。

課題内容、学生成績評価方法で焦点を専門科目にしておきながら、実際は学生の英語力が加味されてしまっている。

英語非母語話者の場合、高い英語力での授業展開を期待していることが多かった。また、日本人学生と同じクラスでの受講を希望する学生も多かった。

英語のみで授業を受けている日本人学生からは、漢字を忘れる、思考が英語になり、日本の会社への就職が不安、といった負の回答もあった。

英語媒体授業学生の最優先期待が英語力の向上と答えた学生が多く(88%)、専門内容を教授したい教員側の期待と異なることがあった。

(3) 反転学習を含む、通信情報技術を英語言語媒体授業に利用することで生じる課題と影響に関しては次の点が明らかになった。

反転学習用のビデオ教材作成に学生を参加させることにより、教材作成に参加していない学生にも学習意欲と理解力の向上がみられた。

反転学習や通信情報技術を利用した英語言語媒体授業では、学生間の英語力に差があるクラスのほうが授業中の発言が活発で、提出課題からも学生の思考の跡が散見できた。

既存の教材ではない、授業内容とは直接関係のないビデオを反転学習用に課し課題を遂行させた場合、学生の興味や関心が広がり発想力に飛んだ回答が得られ思考の跡が散見できた。

以上の研究成果は極めて限られた母数であり、また限定的な状況での調査のため一般化はできないが、今後の調査に向け多くの示唆を得ることができた。研究開始前に予定していた研究が日程や条件などで調整がつかず一部変更になった。これらを含め、今後も継続調査を行う予定である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

Kikuchi, H. (2016). An application of blended learning for English Medium Instruction programs at universities in Japan. 『地球社会共生論集』、pp. 115-130. 査読有 <https://www.agulin.aoyama.ac.jp/opac/repository/1000/18948/?lang=0&mode=&opkey=R149724905625322&idx=13>

Kikuchi, H. (2016). Students' perceptions of online apprenticeship projects at a university. In S. Papadima-Sophocleous, L. Bradley & S. Thoušny (Eds), CALL communities and culture. pp. 215-220. Dublin: Research-publishing.net. DOI: 10.14705/rpnet.2016.EUROCALL2016.9781908416445 査読有

Kikuchi, H. (2017). What can Japan learn from other countries' EMI practices? 『青山学院英語教育研究センター 2016年度研究活動報告書』、pp. 143-160. 青山学院英語教育センター

〔学会発表〕(計 11件)

Hisayo, K. (2015). Students' perceptions of online instructional approach. JACET 国際大会 2015 (2015年8月30日、鹿児島 国立鹿児島大学)(大会要綱、p.88)

菊池尚代(2015). 学生の自主性を高める反転学習の新たな試み: A New Approach to Flipped Learning to Foster Learner Autonomy. 第22回年次大会 日本教育メディア学会(JAEMS). (2015年10月18日、東京 日本大学文理学部)(大会要綱、pp. 186-187)

Kikuchi, H. (2016). The Effect of Smartphone Video Recording Homework. 全国語学教育学会 JALT PanSIG International Conference 2016. (2016年5月22日、沖縄 名桜大学)(大会要綱、p. 71)

Kikuchi, H. (2016). Effects on Online Apprenticeship Projects in a University English Class. JALTCALL 2016 (CALL & the BRAIN 2016). (2016年6月5日、東京 玉川大学)(大会要綱、pp. 97-98)

Kikuchi, H. (2016). Students' perceptions of online apprenticeship projects at a university. The 23rd EUROCALL 2016 International Conference. (2016年8月25日 Limassol, Cyprus キプロス大学) (大会要綱、p. 117)

Kikuchi, H. (2016). Leveraging Global Perspectives to Better Implement EMI at

Japanese Universities. JACET 国際大会 (2016年9月1日、北海道 北星学園大学)(大会要綱、p.51)

Lambacher, S., Pagel, J. & Kikuchi, H. (2017). ELT instructor attitudes and practices of CALL and MALL. JALTCALL2017 (2017年6月17日、愛媛 松山大学)

Kikuchi, H., Pagel, J. & Lambacher, S. (2017). Learner-centered English Class in a digital world. Thammasat University International ELT conference. (2017年7月6日、タイ バンコク タマサート大学)

Lambacher, S., Pagel, J. & Kikuchi, H. (2017). Teacher and student perceptions of adopted CALL practices. Thammasat University International ELT conference. (2017年7月6日、タイ バンコク タマサート大学)

Kikuchi, H. & Harmon, D. (2017). Content, Simulation, and Collaboration: Teaching Model United Nations. JACET 国際大会 (2017年8月29日、東京 青山学院大学)

Kikuchi, H. (2017). Using the Internet to go global. JACET 国際大会 (2017年8月31日、東京 青山学院大学)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

菊池尚代 (KIKUCHI, Hisayo)

青山学院大学・地球社会共生学部・准教授

研究者番号: 70756577